

「境界研究」の創刊によせて

平成21(2009)年度よりスタートした、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」は、日本では馴染みのない「ボーダースタディーズ」なる学問領域を立ち上げ、日本を足場に旧ソ連・東欧、中国、インドなどのユーラシア各地でアカデミアと実務をつなぐネットワークを形成し、それを世界に向けて発信するという使命をもつ。世界のボーダースタディーズをリードする存在としては、北米を中心とする ABS (Association for Borderlands Studies)、英国ダーラム大学に拠点を置く IBRU (International Boundaries Research Unit)、ヨーロッパで生まれ、いまや中東から北米及び南米へとウイングを広げつつある国際ネットワーク BRIT (Border Region in Transition) が知られており、アフリカや東南アジアでも同様のネットワークが生まれつつあるが、ユーラシアには(そして日本にも)そのような場はこれまで存在していなかった。私たちはそれを創り上げ、世界と繋ぎたいと考えている。

他方で、「ボーダースタディーズ」がユーラシアに存在しないわけではなく、それと自覚されていない数多くの研究が私たちの身近にある。それを「発見」して「境界」をキーワードに日本のなかで束ねていく作業がこの雑誌を創刊する理由のひとつである。創刊号を編むにあたり、とくに中国を特集の対象に選んだのは、スラブ研究センター及び本プログラムの共催により、2010年5月に北大でアジア政経学会の東日本大会を開催したことによる。昨今、中国の積極的な海への進出が内外で強い関心を呼んでいるが、共催者としてアジア政経学会で共通論題を設定するにあたっては、中国の境界問題を取り上げ、日中の境界に関心をもつ研究者が共に議論する場を創りたいと私たちは考えた。幸いにも中国の社会科学院边疆史地研究センターの全面的な協力の下、この機微に関わるテーマをバランスの取れた布陣により、インテンシヴかつダイナミックに議論することができた。学会のご厚意により、その報告の成果を基に組まれたのが、本特集である。編集作業を進める過程で、2010年9月、尖閣諸島沖で漁船衝突事件が勃発した。偶然ではあるが、日中の境界問題を考える格好の材料を私たちは提供することになった。

「境界研究」は特集以外に、査読を経た投稿論文によって編まれる。昨年、プログラムの採択が決まるとすぐ投稿募集を告知し、査読依頼、投稿者へのフィードバックなど様々な作業を行ったが、ボーダースタディーズのコミュニティが成

立しておらず、また学会などの組織も整備されていない段階での査読依頼の手続きは難儀を重ねた。しかしながら、幸運にも全員の方が快く査読を引き受けてくださり、今号には採択されなかった投稿者にも丁寧な対応を取ることができたのは幸いであった。査読を引き受けて下さった方々にはこの場を借りて心よりお礼申し上げますとともに、改稿途上の投稿者の原稿を次号以降に是非、掲載できるよう私たちも全力を尽くしたいと考えている。創刊号については、期せずして中国に関する論文が中心となり、次にロシアに関わる投稿論文が並ぶこととなった。私たちがターゲットとする境界研究はフィジカルなボーダーのみならず、メンタルなボーダーをも対象とする。その意味で、投稿論文で後者をカバーするものを収録できたことは喜ばしい。

その他、書評や研究動向などもユーラシアを中心とした地域に関わる興味深いテーマをそろえることができた。これらは本号の中国特集とも密接な結びつきを有している。「境界研究」の記念すべき創刊号は、このように中国の境界について多角的に議論する場となったが、私たちはユーラシアの様々な地域のフィジカルな境界問題、メンタル・ボーダーや理論についての分析、また米大陸や中東、アフリカなど他地域の境界との比較など多岐にわたる特集を今後、展開していきたいと考える。読者の皆様からのご提案もぜひお願いしたい。

なお世界のボーダースタディーズがどのような先行研究を有しているのか、また日本における研究の状況については、私たちのプログラムが和文雑誌に先んじて刊行した Eurasia Border Review や日本国際政治学会の機関誌『国際政治』の特集号「ボーダースタディーズの胎動」(162号・近刊)をご参照いただきたい。また日々の情報については、日本を含むユーラシアのみならず、世界のボーダースタディーズへのゲートウェイとなりつつある、私たちのプログラムのホームページ(<http://borderstudies.jp/>)にお越し願いたい。本雑誌の刊行が、一人でも多くの読者の方々にボーダースタディーズの意義を理解していただき、ご自身の研究とともに、私たちのプロジェクトへと合流して下さるきっかけとなれば、編集者として最上の喜びである。

2010年10月29日

「境界研究」(Japan Border Review) 編集部
岩下明裕 福田宏